



土屋 壮 治 初段 (岐阜太田道場)

～2020年11月29日 取得～



この度は、昇段審査の機会を頂きました太田師範には、心より、ありがとうございます。長年に渡り指導して下さいました事、本当に感謝致します。

また10人組手の相手をして頂いた道場生の皆さん、手を抜かない真剣な組手、あたたかい声援、本当にありがとうございます。そして審査会の場所に御同席頂いた、全ての人々に感謝申し上げます。ありがとうございました。

私が空手を始めた理由、それは『憧れ』この一言に尽きるかと思えます。私が子供の頃は、中国拳法の映画が流行っていました。

映画の中の主人公は、最初は弱くて臆病、拳法の練習も嫌いで遊んでばかり、しかし人生の試練が起きて『強くなる』と決意。毎日の鍛錬を行い、心・技・体を極め、自分の殻を脱ぎ捨て、試練を克服して人として大きくなるみたいな内容でした。このストーリーは毎日コツコツと稽古を続け、少しずつでも稽古を続ければ、凡人でも掴める何かがある！という『武道』の考えを伝えているように感じました。

高校生の頃、通学途中に空手を教えている道場があり、子供の頃の憧れからその道場に通うようになりました。憧れの武道の道場ではありましたが、サンドバックと組手の道場で理念や基本、型の稽古の無い道場だった事もあり、私は卒業と同時に行く事もなくなりました。社会に出て仕事を始め、働く事を経験しながら友人達と将来を語り合い、人生が進んでゆく中、私はバックバックを一つ背負い、外国を旅して回るバックパッカーというものに強く惹かれ、24歳の時に一人で東南アジアを旅すると言う経験を積みました。一人旅を続ける中、自分の本心と向き合わなければならない事が多く、やはり『武道』をやらずに人生を終える事はできない！と強く思う自分が居ました。決意するのに葛藤はありましたが、私は帰国後、『真の強さが手に入る』と評判の『極真空手』を隣町に見つけて、26歳で入門しました。

道場は『実践空手の極真空手』というだけあり、直接打撃のフルコンタクト制。その激しさに最初は気後れする事も多々ありましたが、基本、移動、組手をしっかりと行う稽古の形に、私は憧れの武道の姿を見ました。それは反復する事で少しずつ強くなる武道。その形は私が求めていた形であり、さらに空手の型も行う道場であるという事で、私の心は躍りました。基本の反復動作を繰り返す稽古は楽しく、同じ動作だからこそ見えてくる色々な気づきがありました。しかし組手は道場生同士が激しく打ち合うので、組手の稽古はとても怖かったのを覚えています。そして初めての試合。実践空手である以上、組手の試合は避けられず、緊張しながらも一生懸命打ち合いました。初めて出会った相手と死力を尽くして戦うと言う経験は、さまざまな感情を私にもたらしました。そして試合では身体に染み込んだ動きしか出ないので、反復の大切さを身をもって感じると同時に、戦うと言う事の厳しさを身に染みて感じる経験でした。

その頃から毎日の日課というものを意識し始め、毎日コツコツの鍛錬が始まりました。出勤2時間前に起床し、ストレッチ、腕立て、基本稽古などを一週間、1ヶ月、半年と続ける中、さまざまな葛藤も有りましたが日課は続いて行き、3年も経つと日課は変化し、呼吸、座禅なども取り入れた日課はとても気持ちの良い作業となって行きました。その間も道場の稽古、年に数回の試合、帯の昇級、さまざまな出来事がありました。プライベートでは転職、仕事の多忙、道場に通うのが難しくなったり、道場を数年休ましてもらったりとさまざまな出来事がありましたが、この日課はずっと続いて行きました。10年も経つと試合の相手も県外の強い選手、外国の強い選手と戦う事もあり、格上の選手との対戦の恐怖、試合後、ケガが半年も治らないなど、精神的にも肉体的にも不安定な

事も多々ありました。しかし朝の日課はずっと続き、そこが精神の支えとなって行きました。そして16年、帯も茶帯の1級となり、いよいよ黒帯への審査が近いかな？と感じた頃、またしても仕事の多忙で道場に通う事は困難となり、会社と寝るだけの帰宅の生活が始まりました。日課は1時間に縮小、多忙の日々は2年間続きました。この時も心を支えてくれたのは毎日の日課でした。そんな中、仕事も落ち着きを取り戻し、もう十分だろうと職場に移動を申請。なんとか落ち着いた日々を取り戻し、また道場に復帰させてもらいました。道場に通うことを2年間出来なかった事は本当に悔やまれましたが、日課は毎日続けていたので、大変ではありましたが少しずつ道場の稽古に身体も慣れて行きました。型の感覚もなんとか戻って来た頃、師範から昇段審査の話を受け、本当に長い長い道のりではありましたが、昇段審査に辿り着く事ができました。

審査会はコロナ禍と言う事もあり、場所や日程の関係から、交流試合を行った後で審査会を行うと言う事となり、身が引き締まる思いでした。道場内の交流試合は組手と型の試合をそれぞれ行いましたが終了後、審査会は始まりました。

緊張しながらも審査会は進んで行き、基本、移動、型、補強と進むのですが、地に足が着いていない感じでした。そして最後の10人組手。10人組手は本当に辛かったのですが、ある嬉しい体験をする事もできました。それは自分の殻を破れたと感じた瞬間でもありません。10人組手の対戦相手の方々、本当に真剣に相手をしてくださいました。なので途中、私の体力は限界を超え息も上がってしまいました。ですが対戦相手は容赦なく攻撃してきます。そんな中、様々な感情が交差して、逃げる事も倒れる事も出来ない中、『前に進むしか無いのだ！』と理解した時、私は唸り声を上げながら戦っていました。獣が相手を威嚇、攻撃するさまと似ていると思うのですが、そこからは息苦しさも痛みも感じなくなっていました。そして獣のような自分、なんと言われようと『これが私なのだ！』と半分開き直りながら、ありのままの自分をさらけ出せた事は、人の目を気にして生きて来た私に何か大きな喜びをもたらしました。

そして審査会も終わり、対戦相手の方々から10人組手の気迫が凄かったと言われた時、見栄も飾りもない『ありのままの自分』を褒められた気がして、『嬉しい』と素直に思いました。空手には大きな学びがあります。それは、技、強さ、型などもそうなのですが、なにか大きな学びがあると思うのです。極真空手の黒帯は、私が生涯を賭けて得たいと思った事のひとつであり、それは自分に打ち克たないと得られないひとつの証だと思うのです。空手を始めて、日常の小さな争いから大きな争い、世の中のさまざまなニュースを見る中、武道とはなんなのかと考える事もあります。私は争いは好きではありませんが、自分の身は自分でしっかりと護りたいし、自分の意見はしっかりと伝えられる自分で在りたい。そこには勇気と強さも必要だと思うのです。

子供の頃の『憧れ』は大きな原動力となりました。そして時間がかかっても念願を叶える粘り強さ、諦めない心など、どうすればそれが可能になるのかを考える知恵も与えてくれました。そして念願を果たした時は、本当に本当に大きな喜びがありました。

もし明日人生が終わったとしても満足だ！と思うほどに。空手から始まった朝の習慣は今も続いており、20年経った今はどうなっているかと言うと、出勤3時間前に起床、日記を書く、稽古、座禅、弁当を作って出勤。帰宅後は空手の型を一通り行い、仕事の勉強を1時間、睡眠は1日7時間しっかり取り、休日は自分のやりたい事をする。というような変化を遂げました。空手で得たさまざまな経験は私の財産です。この経験と言う財産、日課、習慣という財産は、私の生涯の宝物となりました。この宝物はこれからの私の人生を明るく照らしてくれると思います。ほぼ20年という時間がかかってしまいましたが、今はこれが最良だったと思えます。最後に極真空手の稽古を体型立ててくれた太田師範、諸先輩方、道場生の皆さん。先人全てに感謝申し上げます、締め括りたいと思います。

ありがとうございました。

押忍